
蒼の狼

瑠亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼の狼

【Nコード】

N3323W

【作者名】

瑠亜

【あらすじ】

お知らせ…

読みやすくするために、文字数を大幅に減らしました。更新もこれで少しは早くなります。

…小説1ページ分が丁度1ページになります。時々内容の修正をしたりします。

大幅に修正したり、少し変えたりと様々です。

あらすじ、章のタイトルはある程度本編が書き終わったら書きます。

2011/12/21 内容変更・1ページ目掲載

#0 【1】（前書き）

話の大部分を修正しました。

#0 【1】

辺り一面に広がる、雄大な自然。

空に浮かぶ灰色の雲は、夕日を押し隠して、僅かに赤く光っていた。
家やマンションが立ち並び、街路樹が道路に沿って植えられている。

10月の下旬を迎えた東京、紅美町こうみちよつは、帰路に急ぐ者で溢れかえっていた。

『紅美町』、という名の由来は、そのまま、夕日が照らし出す紅い町が美しい、という事だ。

それは町の名物の一つでもあり、町民の中で知らぬものはいない。

それ故に、夕日が隠れてしまっている今日は、町民にとっては残念な日なのである。

ふと、冷たい風が、草木を揺らし、道行く人を撫でる。

会社帰りであろう黒いスーツを着た男は、ポケットに手をつ込み、ブレザーにスカートを着た少女は、

マフラーを強く握り締める。

またある学生は、手袋をつけようとバッグの中を漁っていた。

例年よりも寒いこの頃は、風邪が流行っており、マスクをつけてい

る者も多かった。

街路樹の枝には、小鳥達が身を寄せ合つように止まっていた。

#0 【2】

本当に、今年は寒さが異常なのではないか。誰もがそう思っていた。

……背の低い、上下とも黒い制服を着た少年も、その一人だった。

日本人らしい、真っ黒な黒髪に、幼い顔立ちの少年。

ごく普通の中学生の彼、秋谷^{あきたに} 翔^{しょう}は、どっと溜息をついた。

大量の白い吐息が、宙を舞い、やがて消えていく。

ついこの間までは、息が白くなるなどという事は無かった。予想もなかった。

しかし、急激な気温の変化によって、今はそれが起こっている。

何か、嫌な事でも起きそうだな。ふわふわと飛んでいく自分の息を見つめながら、翔は思った。

「そういえば、今日何日だったけ？」

「26日の水曜日。あら、やだな、2で割ると13日だ」

「金曜日じゃないから別にいいじゃない」

ふと、横を通り過ぎていった二人の少女の会話が耳に入る。

13日の金曜日。それは、誰もが知っている、不吉な日。

#0 【3】

今日がその13日の金曜日……というわけではないのだが、『13』という数字は、昔から不吉な数字とされている。

恐らく、どちらにしろ彼女らにとって、今日は嫌な日なのだろう。

会話から察するに、彼女らは13の倍数の日には、同じ事を言っているに違いない。

翔は、誰にも気づかれないう微笑すると、足を少し速めた。

あくまで、13日の金曜日は、不吉な日と言われているだけだ。心配する必要など無いだろう。

「何か起こったら、それはそれで面白いんだけど」

翔は、空に向かって呟いた。

学校へ行って、勉強して家に帰ってくる。夕食を済ませ、風呂に入ったら寝る。

そして、朝になると、また同じ、平凡な日常の繰り返し。

無論それが当たり前なのだが、彼はそんな日常に飽きていた。

日常に、少しばかりの刺激を求めている。

世の中、そう思うようにはいかない。それは彼もわかっていた。

しかし、つい頭の中では思ってしまうのだ。『刺激が欲しい』と。

#0 【4】

翔は、また溜息をつくと、狭い路地裏へと足を運んだ。

この道を抜けると、彼の家がある。

小さな庭が一つの、どこにでもありそうな二階建ての住宅。

ここを抜ければ、3日ぶりに母に会える。そう思うと、気分が良くなり、先ほどの悩みなど吹っ飛んだ。

……父は、翔が4歳の時に亡くなった。ある日を境に、急にいなくなった父について母に聞くと、交通事故だったと、唇を震わせながら言っていたのを、今でも覚えている。

そんな母は、今は家庭の為に仕事で精一杯。3日に一度しか、家に帰ってこない。

家事はもう慣れてしまった。翔一人だけでも、十分こなせるようになった。

故に、母が帰ってきた日も、家事は全て翔がやっている。

……そして、今日は母が帰ってくる日。

普段は夜に帰ってくるのだが、今日は特別に、早く帰ってくるという。

頭の中に、母の笑顔が浮かんでくる。翔は、少し足を速めた。

あと、30メートル、20メートル。家との距離が近づくとつれて、彼の足は無意識の内に速くなっていた。

#0 【5】

いよいよ、あと10メートル。遂に、翔は勢い良く路地を抜けた――
― 筈だった。

彼の出てくる筈だった路地裏の出口からは、ただ冷たい風が吹き抜けているだけ。

静かな風の音を残して、彼の姿は消失してしまっていたのである。

「翔…… まだかな」

翔の家では、白と黄色の縞模様のウールコートを着た、髪の長い女性^{あき}が、窓の外を見ていた。

まるで翔のような若い顔立ちをした、翔の母親である彼女の名は、
^{あき}秋谷 ^{れいこ}玲子。

つい先程仕事から帰ってきたにもかかわらず、彼女は翔の帰りを待っていた。

無論、立ったままでは疲れてしまうので、ソファに座って。

彼女の持つ持つカップには、熱いコーヒーが注がれていた。ふーっと軽く息を吹きかけると、ゆっくりと口に注いでいく。

温かい熱が、全身を駆け巡り、玲子は溜息をついた。

……やがて全て飲み干すと、玲子は視線を横の箆笥へと移す。正確には、箆笥の上にある写真。

しっかりと額にはめられているそれには、翔と玲子、そして若い男性の三人が写っている。

玲子はそれを見て小さく笑うと、また視線を窓の外に戻した。

まだか、まだかと無意識の内に膝を叩きながら、玲子は、裏路地の出口から、翔が出てくるのを待った。

……幾ら待っても、彼は出て来ないとは知らずに。

#1 【1】

「今、変な音が……」

紅葉の咲き乱れる森の中。

一軒の小さな小屋から、その声は漏れていた。

小屋の中は外観からは予想も出来ないほどのもので、一般の家庭とさほど変わらなかった。

唯一変わっているとすれば、木製の家具の形が妙な事である。

例えば、椅子は背が後ろに曲がっていたり、筆筭にはくねくねと曲がった模様がやたらと描かれている。

少々変わった空間の中、一人の少年が部屋の隅にあるベッドから身を乗り出して、窓から外を見ていた。

起きてから間もない彼は今、上下オレンジ色の寝巻き姿で窓から外に飛び出そうとしている。

うつすらとだが、彼のズボンから、細長い物が飛び出しており、上下に動いている。

「行ってみよう」と

一声上げると、少年はベッドから姿を消した。

落ち葉を踏む音が、辺りに響く。

彼の居なくなったベッドには、数本の黄色い毛が散らばっていた。

#1 【2】

「う……」

背中に軽い痛みが走り、翔は小さく呻く。

煌々と輝く日の光が眩しい。いつの間にか意識を失ってしまっていたらしく、身体が重かった。

頭の中で、様々なイメージが、走馬灯のように駆け巡る。

家の前の裏路地……軽く小走りになる自分……そして。

裏路地を出る直前、不意に、空間を裂いて目の前に現れた、沢山の紅葉が咲いている森の景色。

明らかに現実離れた現象だったが、この目で見たのだ。否定は出来ない。

平凡な日常をここまで刺激してくるとは、翔は思いもしなかった。

面倒な事になったな、と翔は溜息をつきながら、のそりと立ち上がった。

「……あれ？　なんか、手が……」

翔は、ふと自身の手に違和感を感じ、目から手を離す。

柔らかい、毛のようなものに触れているような感覚。翔はまさかと

思いつつ、ゆっくりと目を開けた。

彼の目に飛び込んできたのは、衝撃的な光景だった。

#1 【3】

僅かに青みのある、真っ白な毛が、掌を覆っていたのだ。

しかも手の甲には、蒼い毛が生えており、指先には、長く、紅い爪が針のように並んでいる。

袖までしかそれは見えないが、恐らく腕全体が毛むくじやらのだろう。腕を動かすと、腕全体から

ふわっとした感触が伝わってきたのだ。

翔は、流石に驚いたのか、思わず飛び上がる。

彼自身、まだ気づいていないが、恐ろしいことに、彼の顔も変化していた。

白い毛と蒼い毛が、動物独特のマズルを挟んで、綺麗に模様を描いていた。

また、髪や目も、同じく蒼に色が変わっている。

髪に埋もれて見えにくいのが、後頭部からは、蒼い直立耳が突き出ていた。

……翔の姿はまるで、狼のようであった。

翔は声も出せず、その場にへたり込む。

何が無だかよく分からずに、翔はぼーとした目つきで周りを見ていた。

木から、紅葉が次から次へと落ちていく。

翔は、何気なくそれを触ってみる。――感触は、紛れもなく紅葉のものであった。

#1 【4】

これが夢ならば、少しばかりの違和感を感じるはずだ。

それを感じないという事は、これは夢ではなく、現実という事になる。

翔は、この現状を受け入れるしかなかった。

何故このような姿になってしまったのか、何故こんな所に来てしまったのかは、定かではないが、

少なくとも、ここに来れたという事は、戻る方法もあるだろう。

元の場所に戻れば、ひよっとすると、姿も戻るかもしれない。

翔は、少し希望が見えた気がした。

「元の世界には、戻れないよ」

不意に、背後から少年のような、幼い声がした。

紅葉が、辺りを取り囲むように舞う。偶然とは思えないほど、鮮明に。

翔が次々と襲ってくるありえない現象に頭がついていかず、目の前の世界が歪んだ。

初めは、平凡な日常に刺激を求めていた。しかし、今度は平凡な日

常に戻りたい、と翔は強く願った。

こんなありえない事だらけの世界に居ては、頭が混乱してしまう。
翔は、早々に、元の場所へと戻りたかった。

#1 【5】

そもそも、何故自分の考えている事が分かったのだろう。翔は、声の主に、その事を聞きたくなり、思わず訊いてみた。

「あのツ……なんで僕の考えてる事が分かったの？」

……意外にも、答えはすぐ返ってきた。

「僕も君と同じだからさ」

少年からの返事が来たかと思うと、紅葉の壁に、一つの四角い穴が開き、そこから一人の少年が入ってきた。

黄色い髪に、直立耳。動物独特の鼻口部、そして長い爪、長い尾。

寝巻きで隠れて確信は持てないが、彼は全身黄色い毛に覆われた、猫のような姿をしていた。

翔と同じように、ヒトと獣を混ぜたような姿。翔は、危うく気絶してしまふところだった。

視界がぐにやりと曲がり、先程の紅葉の世界の面影は無い。

今まさに、意識を失う一歩手前まで来ていたのだ。

「突然、現実世界とは隔離した世界へと自分は飛ばされた。しかもヒトと獣を混ぜた、いわゆる『獣人』と呼ばれる生き物になってし

まった。

しかし、ここへ来れたという事は、戻るかもしれない。姿も戻るかもしれない。初めは皆そう思うだろう？」

再び聞こえてきた少年の言葉で、翔は意識が覚醒し、はっと顔を上げる。

#1 【6】

「でもね、ここは一度来ると、もう戻れなくなるんだ。別に、方法が無いわけじゃないけどね」

「……その方法は？」

翔が尋ねると、少年は両腕を円を描くように回した。

すると、今まで壁となっていた紅葉が、二人の足元に集まり、一気に押し上げる。

翔は、驚いて飛び上がった。葉自身より圧倒的に重い自分の身体を、あっさりと持ち上げている。

先程までの景色は一変し、紅い森と、青空が現れた。

雄大なこの森が、自身の住んでいた町の周りを囲むあの森とイメージが重なる。

確かに景色は似たようなものだが、ここは全く違う場所だ。翔は、心の底から溢れてくる恋心を抑える。

「ほら、あそこに見える建物だよ」

ふと、少年が口を開き、真っ直ぐ前を指差した。

翔は、蒼い目を横に動かす。途端に、彼の目は大きく見開かれた。

マンションや高層ビルが立ち並ぶ、まるで都会のような街が、森を裂いて存在していた。

それだけでも十分驚く光景なのだが、彼の目は、その街の奥を見ていた。

#1 【7】

今回は、「蒼の狼」を読んで頂き、誠にありがとうございます。

#1 【7】は、現在執筆中のため、公開しておりません。

お気長にお待ち下さい。

こちらでも、執筆は全力でやっておりますので、

応援していただけると助かります。

……そして、やる気が出ます。

まだ小説を書き始めて一年ほどのひよっこな僕ですが、

この小説で、一人でも多くの方に

楽しんでいただけたら幸いです。

これからも『蒼の狼』を、よろしく願います。

. . . b y 瑠亜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3323w/>

蒼の狼

2011年12月31日16時52分発行